

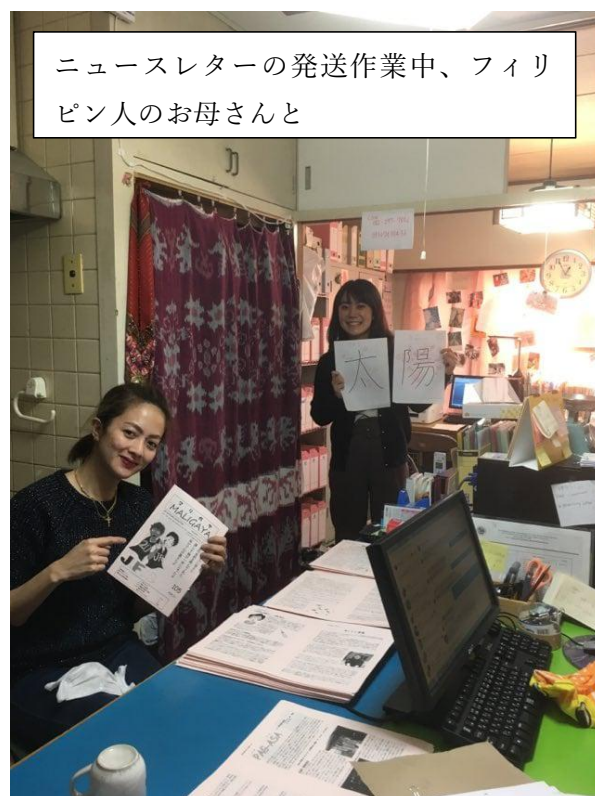
新しい世界を知って

井口 瑞葵

新型コロナウイルスの影響で通っている学部の看板行事であった留学が中止になり、大学2年生の思い出が何一つないまま学年を終えようとしていた頃、JFC ネットワークでインターンをする機会を頂きました。当時フィリピンについて何かしら関わったという経験も知識もなく、翻訳作業すらしたこともない私に務まる仕事なのか最初は不安でしたが、親切で明るいスタッフの方々に一から教えていただき、業務を通して日に日に自然と増える知識がさらに学びたいという意欲を掻き立てた毎日を振り返り、JFC ネットワークに関わる皆様にはこのような貴重な機会を与えていただき、本当に感謝しています。

インターンが始まって最初にやらせていただいた仕事は出生証明書の翻訳でした。自分の出生証明書すら見たことのない私にとって初めての世界で、その他の証明書や陳述書の翻訳を通して、まだまだ知るべきことがたくさんあると実感しました。他にも JFC からお父さんへ宛てた手紙を翻訳する機会がありました。小さい頃一度会ったことがある子、一度も会ったことがない子など家庭様々ではありますが、JFC からの手紙は、「お父さんに会いたい」という熱い思いが全員から伝わる手紙なのです。「お父さん、今どこで何をしていますか、会ったことはないけどお父さんのことが大好きです。お父さんもそう思ってくれていたら嬉しいな」という文章を見た時、この手紙をなんとしてでもお父さんに届けたいと思いました。私自身も高校一年の夏に父が単身赴任先のベトナムで急死しているため、現在父親はいません。発展している日本だったら治っていた病気であったと医師である叔父に聞いて悔しい思いをしたこと、病院の裏のボロボロの冷凍庫に無造作に入れられている父を見て悲しくなったこと、7年間単身赴任をしていたことから父が家にいないことが当たり前であり、亡くなった実感が全然湧かなかったこと、当時年齢上反抗期のクラスメイトも多く、「お父さんなんかいない方がいいのに」と呟く子に一人でなんともいえない気持ちを抱いていたこと・・・今となってはただの懐かしい思い出の一つとなっていますが、何通かの手紙を翻訳して、父親がいないことでどこか空白を感じるという JFC の思いが分かるような気がしました。

頻繁に事務所にかかってくる電話や、次々届く国際郵便、スタッフの方々の打ち合わせの様子や実際に事務所に相談にくるクライア



ントの方や他団体の方々などとの話し合いの様子など常に忙しい事務所、また、新しいケースでまだファイルが薄かったのが翌週来ると資料が増え、何倍もの分厚さになっている光景を二ヶ月のインターンで見て、どれだけ多くのクライアントの方々がお父さんに会いたい、認めてもらいたいなどと助けを求めているのかということを理解することができました。インターンを開始して初めて翻訳した陳述書を書いた、私と同じ誕生日でたった二個下の JFC がインターン最終日あたりで日本国籍が取れることが決まったと聞いて、私も微力ながらその子の未来を明るくすることのサポートができたのかなと大変嬉しく思いました。翻訳は確かに地味な作業です。しかし、この作業があることで子どもたちが救われており、直接関わることのない間接的な仕事も決して無駄ではないということはこの JFC が教えてくれました。

私は現在、人の移動をテーマに観光や移民を考えるゼミの移民コースに所属しています。JFC ネットワークでのインターンがきっかけとなっていることは間違いありません。まだまだ移民に対しての受け入れが進んでいない日本ではマジョリティ側が行動を起こす必要があると考えます。また、まだまだ無知な私は四月以降も週一回で、東京事務所で翻訳業務を継続させていただいている傍ら、移民についていろいろなこと教えて頂いています。里枝子さん、誉子さん、本当にありがとうございます。これからも多角的な面から移民の状況を知り、研究するテーマを見つけたいと思います。

最後に JFC ネットワークに相談に来ている方々に明るい未来が訪れることをお祈りしています。

知らないは残酷なこと

金山 晶

まず始めに、私をインターン生として受け入れてくださりありがとうございました。約二ヶ月間本当にお世話になりました。毎回新たな発見があり、自分自身、大きく成長できる機会となりました。とても楽しく働かせて頂くことができました。

JFC ネットワークさんでのインターンシップを行う前、フィリピン人と日本人の親を持つ子どもとは関わったことがなく、身近にそのような方もいませんでした。それゆえ、実の父親を知らない、親に自分の子どもだと認めてもらえない、両親に放棄されて親戚にたらい回しにされる方がいるという世界があるとは知らず、それとはいわゆる無縁の生活を送っていました。

陳述書や手紙、証明書の翻訳などを通して少しずつその世界に触れることができました。実際にクライアントさんやそのご家族にお会いすることは出来なくても、文面や伊藤さん、市原さんのして下さったお話からどのような状況に置かれているのか、どのような思いで文章が書かれているのかを読み取ることができました。文章を読んだだけでクライアントさんの強い思い、訴えや望みが熟と伝わり、かなり感情移入してしまうことも多くありました。

また、フィリピンの法制度や文化、伝統なども学ぶことができ、同時に日本がいかに弱い立場に置かれている人々に対して不親切な国であるかが法律について学ぶうちに気付かされました。それと同時に自分に出来ることはないのかを考える良い機会となりました。

事務所に訪ねてきたクライアントさん何人かとお会いできる機会も何度かあり、伊藤さんや市原さんの常に親身にお話を聞いている姿や、「大丈夫、必ず方法があるから」と前向きな気持ちになるように励ましている姿がとても印象に残っています。コロナ禍で海外旅行や留学にも行けず、ボランティアなどもなかなかできない中でこのインターンシップは自分にとって世界が広がる、価値観が変わるような経験となりました。活動する上で特に感じたことは、当たり前なことなど何一つ無いということです。今までは、国籍を問題なく取得できたことも、生まれた時から両親と一緒に暮らせていることも、学校行事に見に来てくれる家族がいることに何も疑問に思わずにいました。自分は恵まれた環境で育ったのだと改めて気づくことができ、もっと周りの人への感謝を忘れずに過ごさねばならないと強く感じました。以前からわかっていたつもりではありましたが、日々普段の生活を送っているとつい忘れてしまい、私は無いものばかりに目を向けてしまっていたことに気付かされました。

二つ目に大きく学んだことは、自分で行動し、意識してニュースを見たり様々な人と関わることを通して情報収集をしなければ、情報は何も入ってこない、何も知らないままになってしまうということです。ただ誰かに教えてもらうのを待っているだけでは、普通に過ごしているだけでは世界で何が起きているのか、周りに困っている人はいないのかを知ることはできないということ、常にアンテナを張り、社会問題に目を向け、様々な人と関わることの重要性に気づかされました。インターンを行う前は、JFC の子どもたちが接している問題や状況、無国籍で様々な困難に直面している人が多くいることは知らず、インターンをしていなかったら知らないままだったかもしれません。自分がいかに無知で、視野が狭いかを痛感しました。近くに困っている人がいるのに助けない、ましてやそれに気づかないのは本当に恐ろしく残酷なことだと思います。「知らなかったから」というのはただの言い訳に過ぎず、見て見ぬふりをするのと同じだと思うので、今後は自分の興味のある分野も、無い分野も全て吸収し、どんなチャンスも逃さず、もっと沢山の世界に触れたいです。

貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

